

4 学年次生に対する卒業時のアンケート集計結果のまとめ

- アンケート実施日：令和4年2月15日～3月27日（41日間）
- 回収方法 google フォームにて上記期間に実施
- 学生数及び回収率：学生数105名中91名回答（回収率86.7%）

KEYPOINT

卒業生が愛知医科大学看護学部のカリキュラムについて高い評価をした項目

8. 健康について理解が深まる学習内容が充実している
10. 看護について理解が深まる学習内容が充実している
19. 実習の施設は充実している

卒業生が愛知医科大学看護学部のカリキュラムについて低い評価をした項目（今後の課題）

11. 国外の看護実践に目を向ける学習内容が充実している
12. 国際的保健・医療活動に目を向ける学習内容が充実している
14. 2学年次前・後学期の授業科目の配置は適切である

ディプロマ・ポリシーの達成状況について

9項目すべてで80%以上の学生が肯定的評価をした。

学生生活のサポートについて

評価の高かった項目は、事務職員の相談・支援体制、図書館・医心館の学習環境
課題は、e-ポートフォリオの活用、SNS講習会、国家試験対策
自由記載には就職支援、アドバイザー制度について意見あり

愛知医科大学看護学部での学生生活の満足度

平均73.6%（*2020年度：81.6%）

I. 看護学部のカリキュラムおよびシラバスの構成について

カリキュラム評価に関する項目で卒業生が“そう思う”との回答が多かった項目は、「実習の施設は充実している」（58.2%）「看護について理解が深まる学習内容が充実している」（57.1%）「健康について理解が深まる学習内容が充実している」（57.1%）であった。一方、“あまりそう思わない”“そう思わない”との回答が多かったは「国外の看護実践に目を向ける学習内容が充実している」（34.1%）「国際的保健・医療活動に目を向ける学習内容が充実している」（28.6%）「2学年次前・後学期の授業科目の配置は適切である」（19.8%）であった。

評価の低かった項目の要因として、昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今年度も国際交流の機会が限られたことが考えられる。国際看護に関する項目は昨年度も評価が低く、国際的な視点を養う教育内容の一層の充実が必要であると考え。また、2学年時の授業科目の配置についての評価が低く、昨年度も1・2学年次の評価が低く

同様の傾向にあった。今後、新カリキュラムへの移行に伴う推移に着目し検討していく必要がある。さらに、「学生の個性を伸ばす教育方法が工夫されている」「学生の主体性を尊重したカリキュラムである」は“そう思う”が40%未満であった。遠隔授業での講義は今後も継続するため、その中でいかに個性を伸ばし主体性を尊重していくかも今後の課題と考える。

II. 看護学部のディプロマ・ポリシー(学位授与方針)の達成状況について

9項目すべてで“そう思う”“少しそう思う”との回答が80%以上であった。このうち、“そう思う”と回答した割合が多かったのは「看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる」(56.0%)「看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる」(50.5%)であった。一方“あまりそう思わない”“そう思わない”回答が多かった項目は、「看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている」(9.9%)「看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲をもっている」(5.5%)であった。昨年度も同項目の評価が低く、回答した学生はそれぞれ14.1%、13.1%であった。昨年度よりは否定的評価は減少しており、今年度はCOVID19の影響下で制限がありながらも対面授業や臨地での実習が可能であったことが影響したと考える。

III. 看護学部での学生生活のサポートについて

サポート体制の中で“そう思う”との回答が多かったのは、「事務職員の相談・支援体制は整っていた」(56.5%)「教員のアドバイザー制度は役立った」(48.2%)であった。環境面では、「図書館の学習環境は整っていた」(60.0%)「医心館の学習環境は整っていた」(57.6%)であった。

“あまりそう思わない”“そう思わない”が多かった項目は、サポート面では「SNS講習は役立った」(36.5%)「国家試験対策は役立った」(32.9%)、環境面では「学食の環境は整っていた」(23.6%)であった。また、「e-ポートフォリオ(Mahara)は活用できた」は、“あまりそう思わない”“そう思わない”が45.9%と多かった。

コロナ禍での対応について、いずれの項目も“そう思う”“少しそう思う”が80%前後を占めた。最も“そう思う”が多かったのは「コロナ対応に関して適切に情報提供が行われていた」「コロナ下での遠隔授業は適切に行われていた」(両項目とも37.6%)であった。

国家試験対策について、昨年は“そう思う”が62.6%であり、評価を下げている。自由記載の内容から、国家試験対策の講義内容が変更になったことが一因と推察され、検討の必要性が考えられた。

IV. 看護学部での学生生活の満足度について

学生生活の満足度の平均値は73.6%であり、50%未満の回答はなかった。一昨年度

86.6%、昨年度 81.6%と低下傾向にある。満足度 100%は 6 名 (6.6%)、80%以上は名 (52.7%) であった。理由について、満足度の高い学生は、友人の存在や学習の充実であり、満足度の低い学生は、教員間の連携不足や対応の違いなどであった。COVID-19 の影響に関する内容は、満足度の高低に関わらず全体に記述されていた。

V. 看護学部でのカリキュラム、シラバスの構成、学生生活のサポートに関する意見要望(自由記載)

回答者 91 名中 9 名から意見要望があった。記載内容は、「実習」「カリキュラム」「講義」「国家試験対策」「就職支援」「事務」「アドバイザー制度」に分類された。

実習は、教員による指導・評価の違いや連携について記述があった。カリキュラムについては、実習の時期や長期休暇についての意見であった。実習については昨年度も同様の意見があり、教員間の情報共有・連携をより充実させて行っていく必要がある。

国家試験対策については、今年度は対策講義の内容の不足を感じる意見、学生が選択できるような対策の充実を求める意見であった。また、事務連絡を早めにしてほしいという意見、アドバイザー制度では教員間での差があること、就職支援については愛知医科大学病院以外の施設に関する支援について意見があった。国家試験対策・就職支援について、新たな意見であり、今後検討していく必要があると考える。事務連絡、アドバイザー制度については昨年度も同様の意見があり、学生が有効に活用できるように、教員間でも情報共有や連携を図り、学習環境を整え、支援していく必要がある。

<まとめ>

看護学部卒業生に対して、カリキュラムおよびシラバスの構成、ディプロマ・ポリシーの達成度、学生生活に関するアンケートを実施した (回収率 86.7%)。

カリキュラムおよびシラバスについて、卒業生は、理解が深まる学習内容や明確なシラバスであると評価していた。また、実習の時期や施設、プログラムの充実を評価していた。ディプロマ・ポリシーの達成について、肯定的評価が全項目で 80%以上であった。加えて、4 年間の学生生活の満足度は平均 73.6%であり、おおむね満足していた。

しかし、看護における国際的視点に関する内容が不十分であるという評価は昨年度と同様であった。また、実習や国家試験対策等については、意見が挙げられた。